

明石城公園散策

折井千枝子

幸いにも平成 18 年 4 月 1 日から、明石市立文化博物館(以下文博と略)に、臨時職員として採用された。文博は県立明石城公園に隣接しており、通勤途上同公園を通り抜け散策をするのが、いつしか習慣となった。

春先から初夏にかけては桜から始まり、花水木・バラ等の花木を楽しみ、時には城の石垣にかままる木苺の実を採ったりしていた。初夏から梅雨期にかけては公園の中央芝生(千畳芝生)に発生する茸を観察したり、桜堀周辺では、きくらげ・平茸などを採集し、公園内の自然を満喫していた。この夏は、梅雨が短く 7 月初旬に熊蟬の初鳴を耳にした。例年ならば 20 日過ぎから鳴き出すはず……。熊蟬の声が 9 月初旬まで聞こえたためか、この夏にはツクツク法師の声はほとんど耳にしていなかった。秋になっては、常緑樹の多い公園内の数少ないハゼやカエデの紅葉を人知れず目の保養とした。

通勤の当初は、宮本武蔵作庭の茶室の濡縁でゆっくりと一服、その後二ノ丸・三ノ丸下の南帯郭を通して文博へとコースをとっていた。

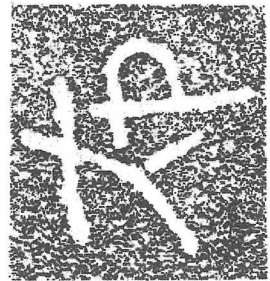
このコースの途上、三ノ丸の東側石垣(図 1.ワ)に、10 数個の刻印があるのに気がつくのに時間はかからなかった。ここの刻印は ○ 印の中に平仮名の「り」、「い」に近いものが多く見られる(図 2.5)。石垣にある刻印については、あまり注意をはらってはいなかったというのが本当のところである。

ある時、秋も終り頃、偶然「布」という文字の刻印を稲荷郭の北側(Q4 の天頂平面 写真 1)に見かけた。「布という刻印がありました。」と文博の指導主事永田浩史先生(KG OB 日文 昭和 57 年卒業)に話したところ「稲荷郭のあのところにありますよ」との答があった。

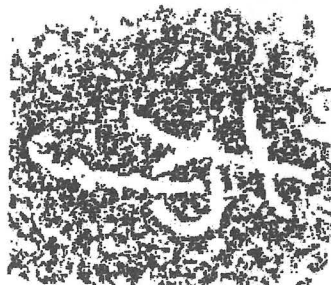
永田先生と加藤尚子さん(学芸員)は、文博のワークショップ「石垣の刻印を捜そう」という企画で指導されている方々である。と

ころが、私の見つけた位置と、先生方の話される位置が微妙にずれるのである。私が見たのは、石垣の上面、平面で真上から見おろせるものである。それに対して、先生は石垣の側面、立面にあると言われる。その立面にある「布

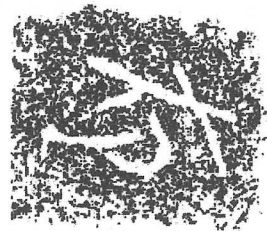
字の刻印を捜そうと、ある日の昼休み、同僚の池野祐季君(平成 19 年 4 月から朝来市職員)をさそって公園に出かけた。その結果は、



E 2



R 2



R 2

最初に私が見た地点から東へ約 3~4m 離れた Q4 の地点で、半分に割られた「布」を池野君が見つけ出した。それを写真に撮り、再び先生に見せたところ「これではありません」と言われた。この「布」字探しをする時、南帯郭から稲荷郭を回って、気がつく限りの刻印を撮影して回った。

これで、また振り出しに戻ってしまった。その後しばらくの間「布」字探しは中断した。

ある朝、それまでとは違う方向から、歩いてみようと思いついた。稲荷郭の北側石垣の下(R1・Q・3・4)は、夏の間樹木や雑草、

S 2

蔓草が繁茂しており、中へ入るのが難しかった。今の時期なら十分に中へ入っていけるという目論見があった。その結果は、最初に見た地点にほぼ近い、Q4 と Q3 との交点、地上から約 2.5~3m のところに「布」を見つけた。しかも下の石から一段おいて、上の所にもあった。「布」字は 2 点あったのである。それを携帯で写真を撮り、永田先生に見てもらった。

「字がこんなに鮮明ではありません。指でさわってようやくわかるものですよ。」と言われた。またまた空振り・・・。ワークショップで小中学生に簡単に見つかるものが、見つからない。私にとっては幻の「布」である。

つい先日(3月4日)再び池野君に Q4 にある「布」字を撮影してもらった。その時に幻の「布」字をようやく見つけた(写真 3)。Q2 のほぼ目の高さにある「布」字をただそれはよほどに注意してみなければわからない程で、風化により薄れていた。さらに、この刻印の下にもほとんど消えかけた「布」字がもう一点あった。

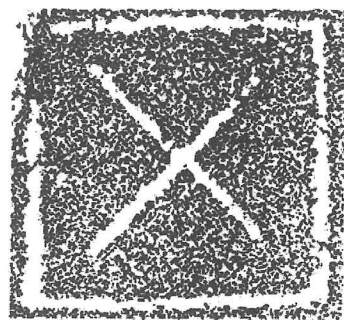
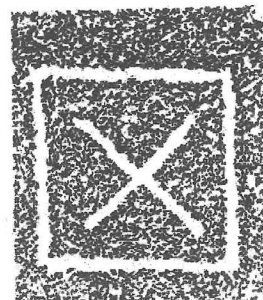
私の見た「布」字は 7 点であるが、元位置にある 6 点は稲荷郭の北に集中して存在する。これは兵庫県調査を追認するものである。私が行ったのは、単に文博のワークショップで見られる「布」字探しであった。

I 1

明石城の石垣の刻印については、島田清氏の考証があり、また昭和 50 年代に行なわれた兵庫県教育委員会による精査がある。それらの研究によっても、刻印がどう意味をもつのか不明というのが本音のところである。

兵庫県の報告書の中で、南帯郭の巽櫓下に集中して認められた刻印 ☒ は、I1(西側写真 7)と I3(東側写真 8)の対称の位置にあるものが秀眉である。この刻印は、櫓下のほとんど対称の位置にあり、目視のみであるが、ほとんど同レベルにある。かつ坤櫓下の G1 の側面にある ☒ 印もまた、ほぼ同レベルにあるように見える。この巽櫓下の刻印は、

石垣を築く時のベンチマークであったとするのは考えすぎであろうか。報告書には、巽櫓下の刻



I 3

印についてのレベルは記載されていない。今一度、きちんとレベルをおさえておく必要があるように思える。

1995年の阪神大震災によって、明石城跡も多大の被害を受けた。その後、石垣の補修工事が行われ、現状の様子になっている。その際に失われた刻印も多数あると思われる。写真 6 の「布」字は、元位置をはずれ、稲荷郭の南側石垣上に置かれているものである。また、凝灰岩に刻印されたものは風化が進むものが多く見うけられる。その為にも、明石城の刻印の精査をされた本報告を期待したい。

本稿を作るに際し、協力して頂いた永田先生、加藤さん、および写真撮影を手伝ってもらった池野君に謝辞を呈しておきます。

本文中の図及び拓本は兵庫県教育委員会の報告書のものを使わせていただいた。

参考文献

- ・島田清 『明石城』昭和 32 年
- ・兵庫県教育委員会『明石城』－昭和 52～昭和 54 年度調査概要－兵庫県文化財調査報告 第 24 冊 1984 年
- ・明石城史編さん実行委員会編『講座・明石城史』2000 年

追記

平成 19 年 4 月 1 日から、明石市立文化博物館は指定管理者制度が導入され、乃村工藝社と NTT ファシリティーズの共同企業体の管理へと移行する。

そのため私は明石市役所本庁へと移ることになった。自然にあふれる明石城公園を散策するという私の楽しみが失われてしまいそうである。

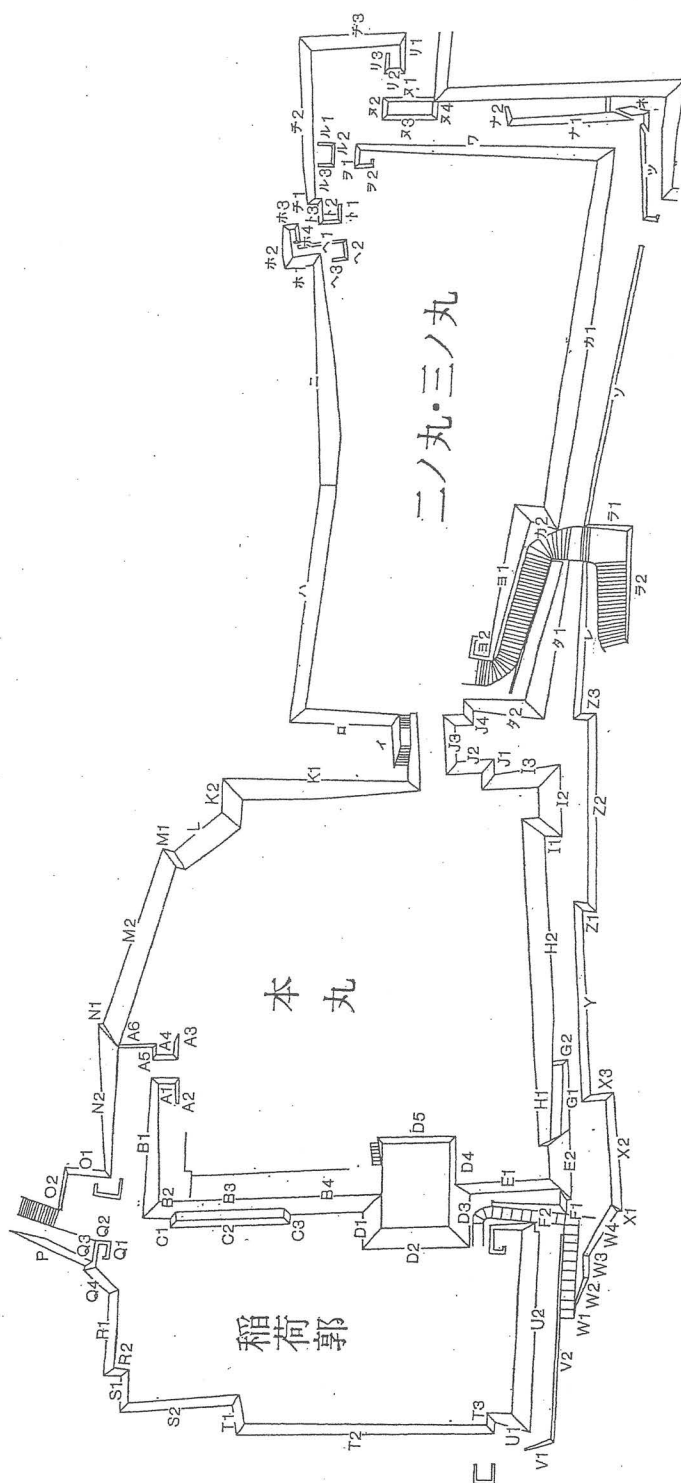
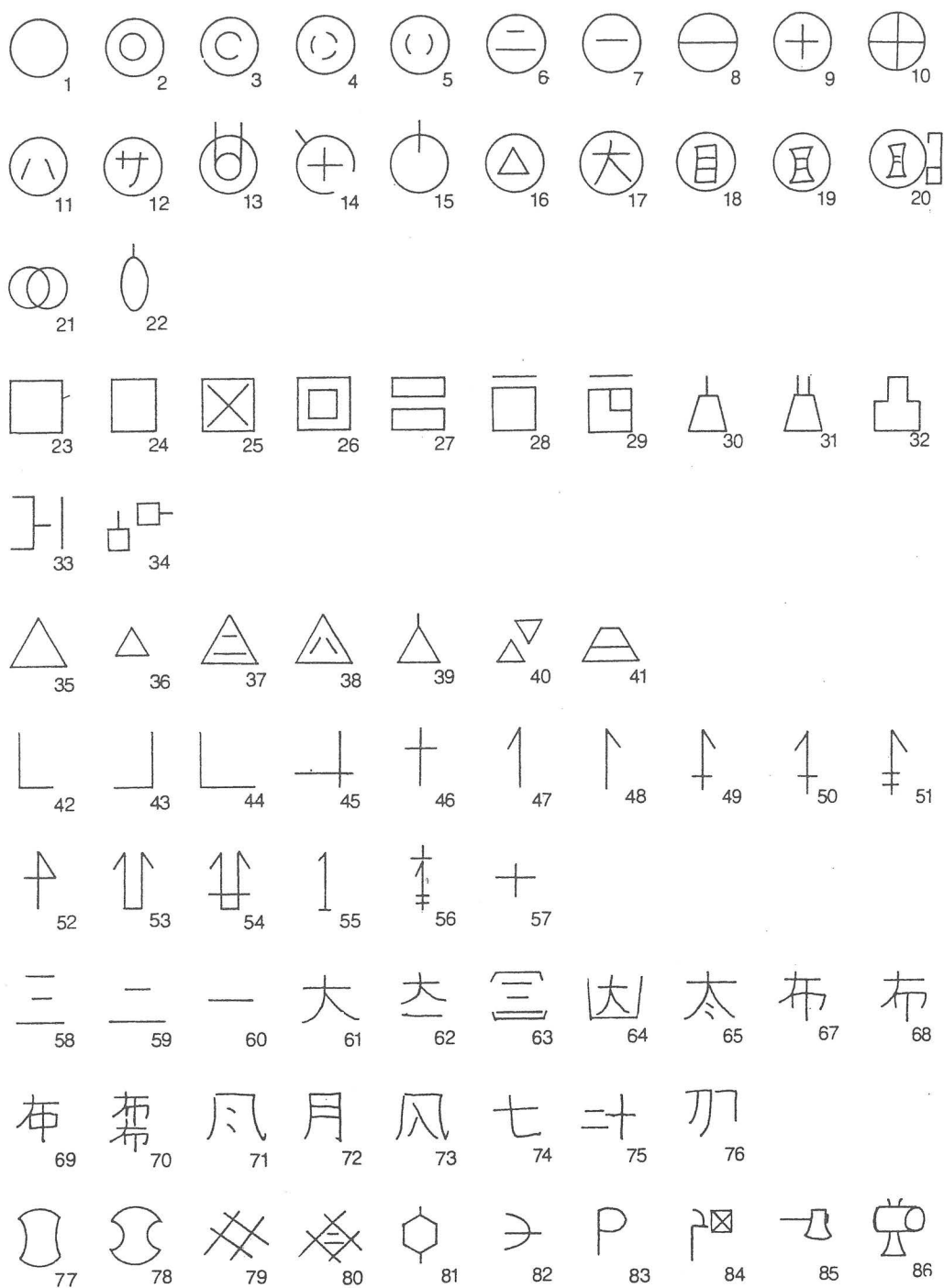


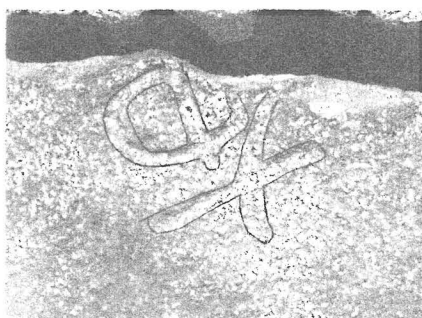
図1 石垣名称図



付図 明石城刻印集計図



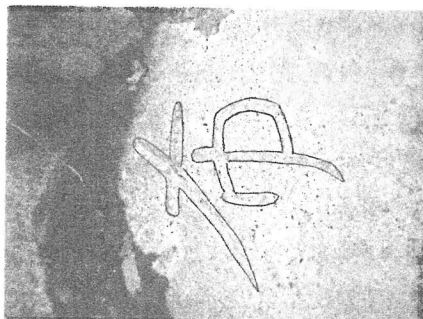
① 最初にみたもの



② 池野君が捜し出したもの



③ ワークショップで捜すもの



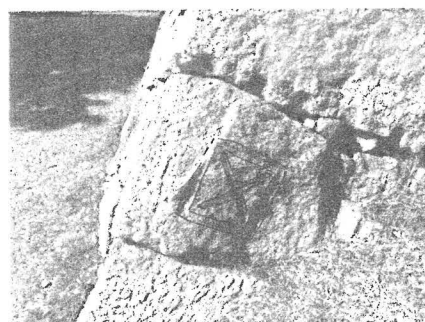
④ 巽櫓北側(下)



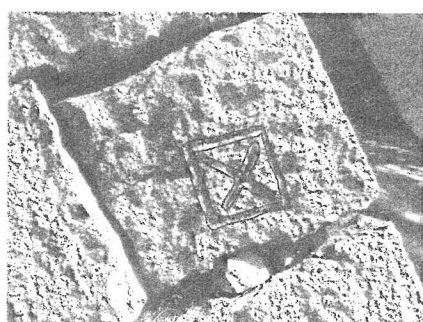
⑤ 巽櫓北側(上)



⑥ 元位置をはなれたもの



⑦ 巽櫓下 東側



⑧ 巽櫓下 西側